

4 川崎病の心臓障害に関する研究

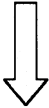
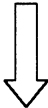
班員	東京女子医大教授	草川三治
研究協力者	札幌医大助教授	豊口昭夫
	自治医大助教授	柳沢正義
	東京医科歯科大助教授	保崎純郎
	東京女子医大講師	遠藤真弘
	京都大学助教授	森忠三
	京都府立医大助教授	尾内善四郎
	九州大助手	田崎孝
	久留米大助教授	加藤裕之

昭和50年度より始まった本研究は、第2年度を迎え、下記のことを目的とした。

- (1) 心臓障害の実態の中、昨年度に於て不十分であった次のことを明らかにする。
 - a. 心電図変化の中、QRS波の高電位所見の頻度およびその意義づけ、さらに不整脈の種類とその出現頻度
 - b. 臨床所見、検査成績から冠動脈後遺症の推定、および冠動脈造影法を行う適応の決定
 - c. ベクトル心電図変化の解明
 - d. 冠動脈後遺症の経時的変化、殊に動脈瘤の退縮について
- (2) 心臓障害の治療法、殊に外科手術例の検討および急性期の治療と後遺症との関連性についての検討
- (3) 罹患後の幼児、学童の養護、管理の方法の制定のために、基礎となる左心機能、運動負荷心電図の検討

幸いにして各協力者の努力により、本年の課題の大半は明らかにすることができた。殊に急性期の臨床症状、検査成績から冠動脈後遺症の有無を推定するためのスコア表が作成され、ある程度役立つことが確認され、また一旦形成された冠動脈瘤が6か月～3年の間にかなり退縮し、約1/3まで減少することがわかったこと、更に急性期の治療で、アスピリンを用いた場合は、従来の副腎皮質ホルモンよりも成績がよく、冠動脈症、冠動脈病変の起こる頻度を約1/3の7～8%に減ずることがわかったことも、今年度の大きな業績となった。

本症罹患児童の今後の管理、養護のために、左心機能の追究、運動負荷心電図の所見についても検討が一部で行なわれたが、これはまだ残念乍ら十分な結果は得られず、本研究班とは直接の関係はなかったが、本症患者そのものの原因究明ができなかったことと共に、今後の大きな課題となった。

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昭和 50 年度より始まった本研究は、第 2 年度を迎え、下記のことを目的とした。

(1)心臓障害の実態の中、昨年度に於て不十分であった次のことを明らかにする。

- a. 心電図変化の中、QRS 波の高電位所見の頻度およびその意義づけ、さらに不整脈の種類とその出現頻度
- b. 臨床所見、検査成績から冠動脈後遺症の推定、および冠動脈造影法を行う適応の決定
- c. ベクトル心電図変化の解明
- d. 冠動脈後遺症の経時的変化、殊に動脈瘤の退縮について